



I-OWA 創業 10 周年記念講演(要約) 薩摩スチューデントの志

講演：林 望 氏

レポーター：赤堀 薫里

明治維新という国家の大革新について学校で習う歴史では、薩摩スチューデントはほとんど知られておらず過小評価されています。1865 年に薩摩スチューデント 15 人と、4 人の外国使節団、総勢 19 名が国禁を犯し、極秘で薩摩藩の藩費でイギリスに留学並びに外交折衝に渡りました。その前年、長州は、後に長州ファイブとも言われる伊藤博文、志道聞多(井上聞多、のちの井上馨)等 5 人がイギリスに渡りました。

通俗のジャーナリズムの世界では、長州ファイブが明治維新をリードしたかのような印象が定着しており、長州ファイブは映画化もされています。しかし、薩摩スチューデントはいっこうに映画化もされません。今年がちょうど薩摩スチューデントの渡航150 年記念の年である為、是非、大河ドラマに取り上げてもらいたいと、鹿児島県知事を始め様々な方々に働きかけをしましたが叶わず、依然として薩摩スチューデントについては過小評価のままです。私が歴史的な現実を調べたところ、明治維新政府は、薩摩スチューデントが居なければ恐らく失敗していたでしょう。

例えば、明治政府は秩禄買い上げのためのお金が無いため、欧米で外債発行による資金調達を行い、秩禄を買い上げました。それをしたのは、薩摩スチューデントの一人、吉田巳二です。彼はイギリスで学んだ後、渡米、クリスチャンになり米国の大学で学びます。この人が明治政府の財務方面の知恵袋でした。

この時、彼は外債をアメリカで公募しようとしたのですが、薩摩スチューデントの仲間であり、米国の少弁務使だった森有礼から断固たる反対を受けそれをあきらめています。その後、イギリスに渡り外債公募に成功し、これをもって明治政府は秩禄を買い上げます。もしこれがなかったら、明

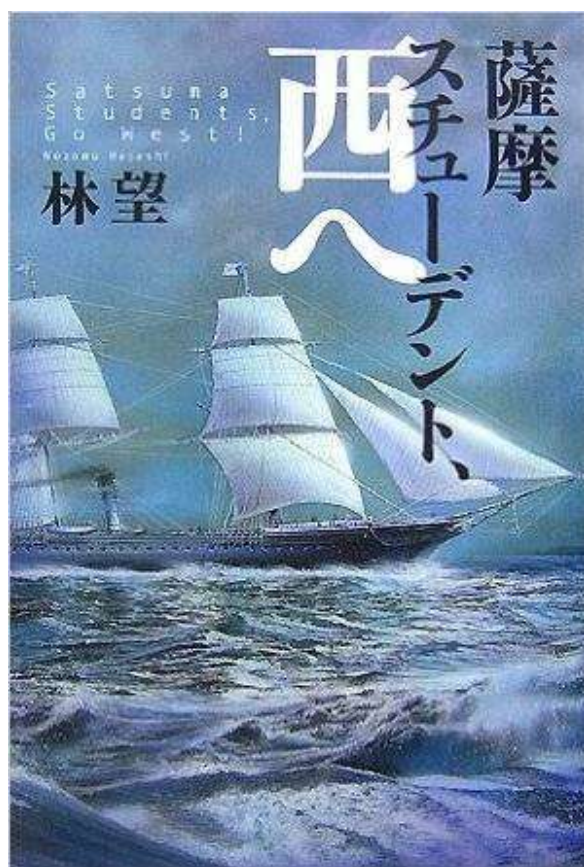




治政府は経済的に破綻をきたしていたことは明白でした。

明治政府の教育文化方面でいうと、東京大学の前進である東京開成学校の初代校長である畠山義成、また、現在の東京国立博物館の前進である東京博物館の初代館長町田久成、皆さんご存知のサッポロビールを作った村橋久成もみな薩摩スチューデントのメンバーです。その他、松村淳蔵は海軍や軍事建築を学んだ後、帰国し、日本海軍の草創期に非常に大きな功績を残し、後に海軍兵学校長になります。森有礼は、初代の文部卿となり、寺島宗則は、初代の外務卿になります。彼らも全員薩摩スチューデントです。薩摩スチューデントの中で最年少、長沢鼎、本名磯永彦輔は当時、13歳でしたが、後にカリフォルニアに渡りカリフォルニア・ワインを成功させ、世界的な活動をしました。ですから、薩摩スチューデントをもっと正当に評価しないと、明治維新の根本を理解していないことになるでしょう。

この後、薩摩スチューデントが、イギリスから近代国家になるための要素を学んだことや、日本ではいがみ合っていた薩摩藩と長州藩が、遠いロンドンでは日本における薩長連合に先んじて交友関係が出来上がっていたこと。これらは数少ない例ですが明治政府の中で、外交・教育・海軍などすべての分野で薩摩スチューデントは大きな貢献をしました。その点でも、彼等のことはもっともっと維新の大変革の中でいかに大きな働きをしたのか再評価されるべきです。多数の貴重な写真を交えて林望氏の薩摩スチューデントに対する熱い思いを伺いました。(文責:I-OWA)





I-OWA 創業 10 周年記念対談(要約) 明治維新のチャレンジ

講演：林 望 氏、岡本 和久

岡本 | 私が林さんの「薩摩スチューデント西へ」という本を読んで、一番感動したシーンは、薩摩と長州の出会いの部分だと思います。あれは一つのクライマックスだと感じました。

林 | ええ、そうですね。

岡本 | あれほどお互いに喧嘩をしていたのが、海外という違う世界に入ったところで、突如として同胞になってしまふところが面白いですね。明治維新の後、3 年で廃藩置県があった。それまで多くの日本人にとって、藩そのものが自分の国だったわけですよ。「おらが国」と言えば、生まれ故郷の藩だった。それが突如として、日本がみんなの属するひとつの国になったのです。隣の藩も隣の県や町になった。廃藩置県で国民の意識が、がくんと広がったわけです。よく明治の日本人は、その変化に順応していったなと思います。翻って今、日本というものが、非常にグローバルな世界に投げ込まれているにもかかわらず、なんとなくグローバル化に乗り切れていない。その辺りの違いはどう考えますか？

林 | 最近、日本の留学生の数がどんどん減っていますよね。子どもの母数が減っているのだから留学生の数が減ってもしょうがない面もありますが、多くの方が外国に行かないで、「内輪でゲームでもしていよう」みたいな内向きになっていることは事実です。薩摩は、「座しては減るより仕方ない」と非常に切所に立っていた。それだからこそ、「薩摩の枠組みを超えて日本をどうす





長期投資仲間通信「インベストラيف」

ればいいのか」というビジョンを持ちえたと思います。坂本龍馬にしたってそうですよね。高知という所は、経済的に言えばそれほど重要なところではない。長州だって別に豊かではない。ところが今の日本は、中途半端に豊かになった為に、切羽詰まった危機感が少なくなっている気がします。僕はね、案外、江戸時代の人、藩という枠組みを外れていた人がいっぱいいたのではないかと思います。武士だと参勤交代で、江戸詰めという人達がいいますよね。藩としては、姫路藩に属しても、江戸で生まれ育った人もいます。僕たちが普通に考えるほどには、いわゆる藩ナショナリズムというものが強くはなかった可能性があるのではないかと思います。

岡本 | 鎖国と言っても、出島なんかを通じて西洋のものが結構、入ってきていましたよね。

林 | 建前と本音は大分違いますね。薩摩が密貿易をしていたことを幕府が知らなかったわけではないですね。ただ、それを目くらして責めていくだけの力が、幕府には残されていなかっただけでないかと思います。

岡本 | よく士農工商と言われ、身分制度が言われますが、結構、侍の子が商家の養子になったりその逆があったり、継承順位がずっと下の藩主の子供でも他家の立派な跡取りになって活躍したりしている。結構、実力次第で才能のある人は取り立ててもらっていますよね。

林 | 江戸時代の士農工商という制度は、あってなきがごとき制度です。インドのカースト制度、アメリカにおける白人と黒人の一種階級的な差別や、イギリスの階級差別とは全然違いますよね。日本は、はるかにフレキシブルでファジーだと思います。

岡本 | 今、グローバル化に少し二の足を踏んでいるのは、危機感の欠如ですかね？

林 | そうだと思います。結局なんとかかなと思っているのでしょう。本当はなんともなっていないのかもしれないのに。実際IT関係では、ほとんどアメリカに占領されているわけです。このことに危機感を持たないのは実におかしいと僕は思っています。経済的にはどうですかね？

岡本 | やはり、同じことが言えるのではないのでしょうか。バブルが崩壊した後、日本が非常に立ち遅れたのは、グローバル化の遅れ。他の国の企業は、生産活動、販売活動を、一国の中から世界全体に広げました。しかし、日本は不良債権処理や、内向きのことで非常に手間取ってしまった、そのために世界の中で遅れをとるようになってしまったと言えるでしょう。

林 | 今、モノを買うのにアマゾンや楽天等、ネットで買う人が多い。20 世紀のビジョンが実現しているわけです。僕はもともと書誌学者なので、書物というものが、日本で滅びるのか、電子出版、電子本がどこまで一般化するか、その点には非常に興味があります。多くの方は、実際



長期投資仲間通信「インベストラيف」

に出版に携わっていないのでご存じないですよ。これは全く不平等条約の植民地のようなものです。例えば、アメリカでは電子出版で 1,000 円の本を出すとするでしょう。アップルやキンドルのような会社が、一定のフィーをとります。でも、それは本の出版社が出版コストを負担するのと同じことです。ですからアメリカの著者たちは、6 割という途方もない印税を取るわけですよ。欧米のほうでは、電子化で書くと儲かるから電子化しますよね。日本ではどうして漫画ぐらいしか電子化しないかという、1,000 円の本を出した場合、そのうちの 3 割は黙ってアップルが取るわけです。更に残りの 3 割は、いわゆる電子化会社を取る。つまり、仲介の人達が 6 割を取ってしまい、残りの 4 割を出版社と著者で分け合うことになります。そうすると、私どもは、紙の本に比べて電子本の印税の方が低いわけです。結局、電子本で出すメリットがなくなってしまう。つまり、アメリカのようにどんどん電子本で新しいものが出てくる潮流に乗り遅れてしまう。文化的なすごい不利益を被っていることを、一般の方にも知っていただきたいですね。

岡本 | 林さんもアメリカで著作業をやっていたら、今頃、相当、資産を築いていたでしょうね。

林 | 今頃、田園調布に御殿が建っていたでしょうね(笑)。

林 | 薩摩チューデントの目的はロンドンのユニバシティ・カレッジで学んで、結果を日本にもたらし、日本を近代化するというのが建前でした。彼等が英国に行ってからまもなく日本では、戊辰戦争が起こります。薩摩藩は、大砲隊や鉄砲で攻めて行かなければならないので、それどころではない。行ってから半年くらい、夏休みが終わりまだ何も勉強していない状態で、薩摩チューデントというミッションが早期打ち切りになってしまう。しょうがないから、モンブランというフランス貴族を通じてフランスに渡り、その後、渡米、キリスト教原理主義のハリスの手下になる等、それぞれ分散します。一人、また一人、三々五々日本に帰りました。その中の何人かは戊辰戦争で戦死するので、一つのまとまったパワーとして、海外で学んできたということで凱旋するというのがなかった。いつの間にか雲散霧消してしまったという悲しい歴史ですね。実際には、後付けて見れば、彼らが持ち込んできたヨーロッパ文明は、決して小さなものではなかったと、そこをもっと一般の人に知ってもらいたいですね。

岡本 | 薩摩が送った意図として、もともとは戻ってきて薩摩のためになることを期待した。ところが、実際は日本のためになることをした。そういう意味ではミッションが拡大してしまったのでしょうか。

林 | いや、五代友厚などは最初から薩摩のためというけちなことを思わず、日本のためだと思っていたでしょうね。薩摩が、日本を占領するくらいに思っていたかもしれません。坂本龍馬もそうですが、「藩というような小さな、ちまちました区別ではなく、日本国全体でヨーロッパ列強と対峙しなければ勝てないぞ」ということです。インドは、国内が分かれていたため、そこを



長期投資仲間通信「インベストラيف」

上手くイギリスに利用され、仲間内を戦わせるようにして植民地にされてしまった。そのことをちゃんと知っていたわけです。後に寺島宗則が、イギリスの外務大臣と話をする中で、「イギリスはあなた方に親切そうなことを言います。しかし信用してはいけません。イギリスは隙があったらあなた方を食い殺そうとする猛獣のようなものです。日本は決して油断をしてはいけません。」と言われます。つまり、そういう内訳話をして、日本のために注意をしてくれるくらい薩摩の人達を信用しているのです。その頃、徳川幕府が送った使節団が来ますが、門前払いで会ってはもらえない。つまり、イギリスは幕府の人を相手にせず、これからは、薩摩の人が日本全体を掌握するようになるだろうから、薩摩の人達を相手にしようと思っているわけです。それには「藩同士戦っているようなことは駄目ですよ」ということですよね。

岡本 | なぜか、明治以降の日本の歴史は、学校でもあまり十分に教えられていない。しかし、歴史は繰り返さないかも知れないが、歴史から学ぶことは山ほどある。我々は激変の時代に海外に飛び出し、そこで多くを学び日本に持ち帰り、維新の大業を実現した若者たちがいたことをもっと知っておくべきですね、特に若い人たちは。それが日本の若者たちへの刺激になるかもしれない。大学時代からの良き友である貴兄とこうして共に講演会で話し対談をできるというのは私にとっては本当にうれしい出来事でした。本当にありがとうございました。

(文責:I-OWA)